



「光のポリフォニー」



「無題」銅・真鍮／磨き・硫化・いぶし仕上げ



「aging (エージング)」



「和の回廊」



NO.37 2002.4

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会

アピアランス



光ステンド工房 代表
ステンドグラス作家
HIRAYAMA TAKEO
平山 健雄
横浜市港北区菊名4-7-12
TEL/FAX 045-401-7641
「光のポリフォニー」
富士市オーバードホール
2,000×6,000mm

光が奏でる色彩が建築物の内部空間に静かに和らかなリズムを伴って漂っている様をガラスエッチングの技法と古典的な焼絵ガラスの技法を合わせて表現してみました。四季の変化に共鳴して光輝くステンドグラスです。



アーティスト 主宰
造作作家/鍛金
SAMESHIMA TAKAKO
鮫島 貴子
東京都豊島区北2-16-4
TEL 03-3576-9534
商業空間・AVANCE/西荻窪
「無題」銅・真鍮/磨き・酸化・いぶし仕上げ
1,050×250×220mm

金属の板を何十回も金鋸で打ち絞ることで形づくられるオブジェ。手を通して生まれたそのエネルギーによって空間に力強く、そして温かな生命感を与えることができたら、と考えています。http://atelier-artis.com



造形
SIMABUKURO HIDEO
島袋 英男
東京都世田谷区深沢3丁目11-1
TEL 03-3702-3543
「aging (エイジング)」

入会を進めて貰った、三木氏、会長、諸役員の方々にお礼申し上げます。此の度の入会を契機に、18年来追求している立体“忘れえぬ人々”“PARTNER”“モノクロ絵画”3シリーズを一入の気持を込め、完成したい



ビーファクトリー 代表
彫刻家
NAKAMURA SHIGEYUKI
中村 茂幸
東京都足立区鹿浜1-13-19
TEL 03-3657-8155
「和の回廊」
オン・ザ・パレット展 建築会館1F展示室於
2700×2000×2000

作品と空間の関係を常に意識して今日迄制作して来たが、ともすれば作品だけが雄弁に一人歩きをしてしまう。そんな繰り返しの中で作品「和の回廊」では対峙しながら対話の出来る作品をと考え制作した。

CONTENTS

第11回AACAA賞審査講評	1
第13回2001高山aaca景観シンポジウム	5
高山aaca景観シンポジウムに参加して	8
aacaトーク	10
トピックス	12

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせください。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行います
のでご了承下さい。

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員 長 玉見 満

副委員 長 高部多恵子

北村孝昭、石田真人、山崎輝子

長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三

事務局 長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

発行：観日本建築美術工芸協会

Phone 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

〒108-0014

東京都港区芝5-26-20

建築会館6F



審査委員長	内井 昭蔵
審査委員	會田 雄亮
//	栄久庵憲司
//	近江 栄
//	澄川 喜一
ゲスト審査員	松本 哲夫

審査経過、並びに審査総評

AACA賞は今回で11回を迎えることになりました。この間にすぐれた環境をつくることに寄与した芸術家、デザイナー、造形家など個人を表彰するAACCA賞（本賞）とすぐれた環境をつくるために支援、協力、調整などを行い、多大な貢献をされた団体、又は個人を表彰する特別賞にそれぞれ12人、11人が選ばれてきました。

毎回すぐれた作品が多く、いずれを賞に挙げるかを決めるのが難しく、本賞に相当するものでも特別賞として表彰することがありました。今回の審査においても優劣がつけがたいものが多く、委員の

中では奨励賞ということで本賞に準ずる作品を表彰したら如何なものかという意見がでました。そこで協議の結果、AACCA賞（本賞）は、善き牧者愛徳の聖母修道会本部修道院 礼拝堂の手すき和紙によるデザインをされた堀木エリ子氏を選び、「霞城セントラル やまがたアートチェアプロジェクト」の山形建設工業団地協同組合デザイン開発機構、株式会社環境計画研究所、その他、制作に関わる子どもたち、職人、関係者の方々。「星祭りー銀河を渡る舟アート計画およびオブジェデザインー西島リバーサイドヒル団地」の都市基盤整備公団関西支社+AD&A、竹村楊子氏、駒田哲男氏。「青森県男女共同参画センター／

子ども家庭支援センター アピオあおもり内部イベントホール外側壁面 Oh-AOMORI RINGO・YAMA・YANE」atelierA+板画イタエ秋田昌子氏。「パストラルコートと街の修景」柴田知彦・柴田いづみ+エスケイエム設計計画事務所。以上の4点に奨励賞を贈ることにいたしました。なお、特別賞の該当はなし、としました。

今回もすぐれた作品を提出された多くの人々に心より御礼を申し上げ、今後も宜しく御協力賜りますようお願い申し上げます。

（審査委員長 内井昭蔵）

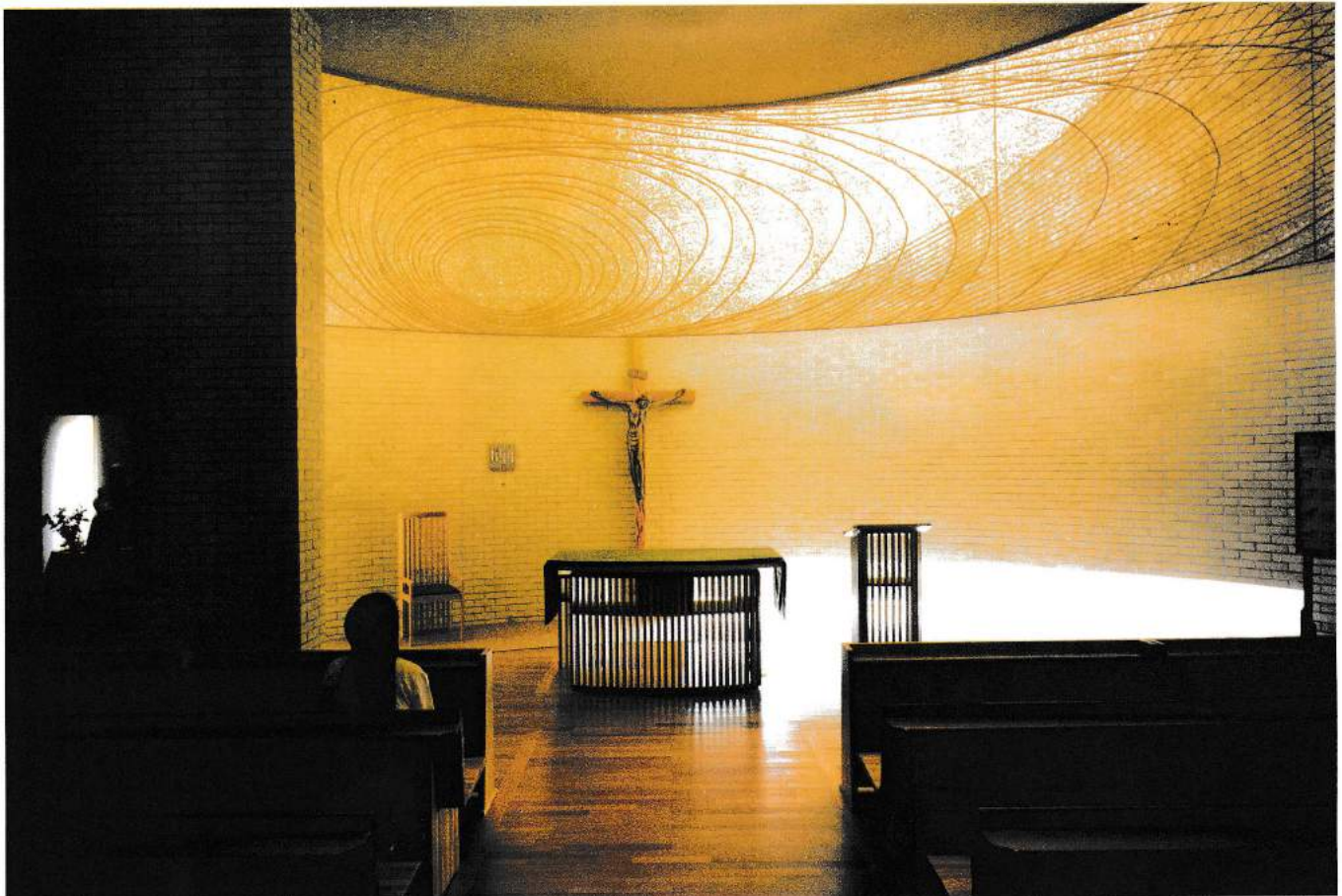


アトラクション

弦楽四重奏

AACA賞

善き牧者愛徳の聖母修道会 本部修道院
作者：堀木エリ子・株式会社竹中工務店



撮映 日経アーキテクチュア

審査講評

堀木エリ子氏は、これまで手すき和紙の表現を追求してこられました。善き牧者愛徳の聖母修道会本部修道院礼拝堂、及びホールの和紙による造形は、すばらしく感動的な空間をつくり出していました。和紙を透過した光は、あたかも神の光にも似た柔らかく神秘的で包み込まれるような空間をつくり上げており、日頃の和紙に対する堀木エリ子氏のひたむきな表現努力がみごとに結実したものと思われます。

当然、礼拝堂の建築空間のコンセプトと一致していることがこの和紙の造形を一層引き立てていますが、建築設計者との共同作業の成功に対しても高い評価が得られました。

(内井昭蔵)



撮映 松村芳治氏

AACA賞奨励賞



霞城セントラル
 やまがたアートチェアプロジェクト
 作者：山形建設工業団地協同組合デザイン開発機構
 株式会社環境計画研究所
 その他、制作に関わる子どもたち、職人、関係者の方々



上げたものだと云う。実際に予算の数倍も掛かってしまったそうだが、だからこそ素晴らしいものが出来たと云える。これこそ市民型の新しいコンペのあり方を教えてくれたものである。

(會田雄亮)

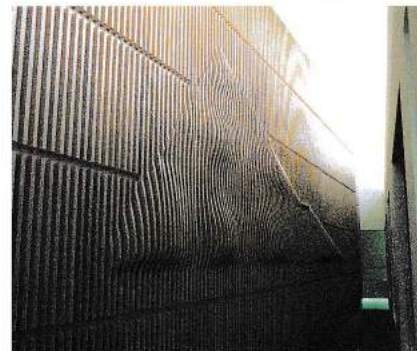
長い間開発の遅れて来た山形駅の西側に、そのシンボルとして25階建の霞城セントラルが建設されたが、高い吹き抜けを持つアトリウムの中に点々と設置されているのが、このプロジェクトの作品群である。

山形名物の「いも煮」「ラフランス」「ブドウ」「最上川下りの舟」と素材で、しかも造形力豊かなベンチが並んでいる

が、近くに寄って見ると20センチもあるムク板で「ラフランス」が作られ、直径30センチもある木球が「ブドウ」の実であったり、兎に角その材料の並はづれた良さにびっくりする。

聞いてみると、そのはず、子供達を対象に公募されて選ばれたデザインを、個性をなくさぬ様、大工さん、鋳物屋さん、工芸家など沢山の専門家が参加して作り

AACA賞奨励賞



青森県男女共同参画センター／子ども家庭支援センター アピオあおもり 内部イベントホール 外側壁面 Oh-AO-MORI RINGO・YAMA・YANE
 作者：atelierA+板画イタエ秋田昌子

青森県男女共同参画センターと云う、まるで明治維新のような名前の建物に入ると、以外にも内部は薄肌色のクリーンな空間であった。ロビー空間にそっくり包み込まれるように、イベントホールの外壁がつづいている、全体をリブで構成されたデザインだが、コンピューターによる三次元のレリーフが、丁度アリアを歌うように美しく構成されている。

少々レリーフを見るには引きが無く、作家には不利なシチュエーションだが、作家の秋田昌子さんは、巨大なリブの外側にのびのびとリズムを歌い上げている。作家はこの技法を板画と称しているが、新しい方向を打出した成功例と云えるだろう。

その他、合板を色々な曲線に曲げて、レリーフを構成したり、又、木質を変え

てグラデーションを作ったスツール、又、布、合板を使って作った一連の照明カバー等、随処に作品を試みているが全体に少しもうるさくない。このプロジェクトは、設計者とアーティストが互いにプラス方向に融合し合った結果の様に思えた。

(會田雄亮)

AACA賞奨励賞

「星祭り」－銀河を渡る舟アート計画およびオブジェデザイン

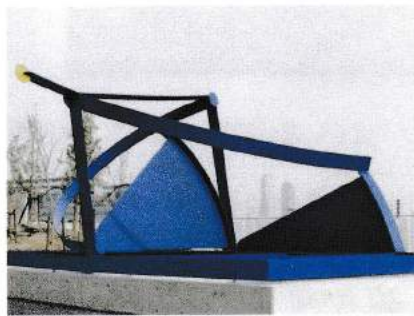
－西島リバーサイドヒル団地

作者：都市基盤整備公団関西支社+AD&A 竹村楊子 駒田哲男

淀川河口工場跡地2.5haを新しい西島団地（5棟760戸）にする際のアート計画。淀川と団地をスーパー堤防で結



び一体化する計画で人工地盤を堤防レベルまで全体に上げ、地下は駐車場となったが、その排気口の乱立を環境的に造形化しようと始まった。大きな淀川、広がる空より「七夕の夜空」「天の川」をイメージし、「星祭り－銀河を渡る舟」を計画した。排気口モニュメントとして夏の大三角形－白鳥座（デネブ）琴座（ベガ）、鷲座（アルタイル）。



広場にはアンドロメダ座、ケフェウス座、ペルセウス座。黄道には照明灯オブジェとして六星座が団地に散りばめられ、団地への導入は「銀河を渡る舟」4つのオブジェが道しるべとなっている。北極星に向けたフォーリーより夜の星を眺める事のできる、星祭りのロマンに満ちた団地アート計画となっている。

オブジェ数22点、総費用5,000万円、単純に230万/1点の予算で、サイズは、平均W5m×D3m×H4m（排気筒オブジェ）。鉄に亜鉛メッキ下地塗装。

計画1995年より7年をかけて完成した。限られた予算でまとめたテーマ性を持たせること、つまり下町工業地帯の工場跡に建った用地に星のオブジェ群で宇宙の夢を伝えようと宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」と星座とを7年間の友としロマンを追求した姿勢が評価された。

（近江 栄）

AACA賞奨励賞

バスラルコートと街の修景

作者：柴田知彦・柴田いづみ+エスケイエム設計計画事務所

戦災で焼土と化した山の手の一画から木を植えつづけた目白の住民の長い道程は、一粒の種から半世紀の後、緑濃い良好な住環境を形成しつつある。

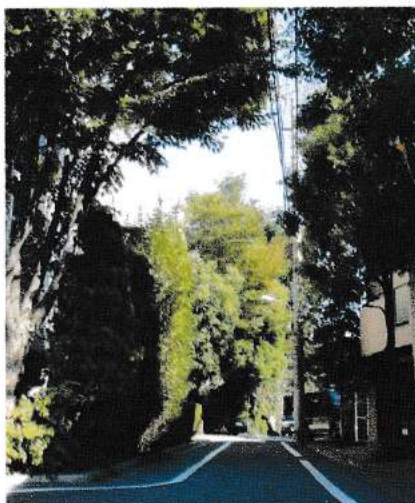
それにはここに住む建築家の努力と周辺住民の共感に支えられた結果である事を知る必要がある。勿論、行政や議会側の理解も必須の条件となる。

住民のなかの一主婦の声から、大きな屋敷林をもつ宅地のマンション計画を、区買上げの目白の森林公園へと4年の歳月を掛けての周辺住民の意志を訴え続けた努力の賜物は現在園内の池からトンボが羽化し、うっそうとした森に四季の花が咲く。その南側に建築家の自邸やバスラルコートを含めた樹木は、道路をへ

だてたマンションにも働きかけによりケヤキやコブシが育って良好な道路環境を形成している。

個々の住民と建築家の努力によって、コンクリートジャングルの中の小さな緑化運動が少しづつでも前進する姿を評価した。

（松本哲夫）



撮影：米倉栄治氏

第13回 2001高山aaca景観シンポジウム「森林文化と景観」

日時：平成13年10月17日(水)
午後2時～6時

場所：飛騨・世界生活文化センター
〈飛騨芸術堂〉

パネルディスカッション

コーディネーター：内井 昭蔵

パネリスト：佐々木 高明

安田 喜憲

太田 邦夫

北川原 温



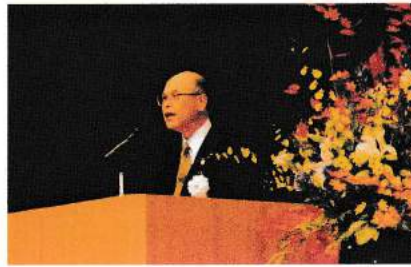
社団法人日本建築美術工芸協会
会長 芦原義信

本日は第13回2001高山aaca景観シンポジウムにお集りいただきまして誠にありがとうございました。

私も日本建築美術工芸協会は建築家や芸術家、工芸家が一堂に会して種々ディスカッションを重ね日本の都市景観を少しでも良くしていこうという団体であります。

その一環として毎年各地でシンポジウムを開催いたして参りました。第13回目は高山市で催すことができました。これは、関係者の皆様の大変なご支援のおかげであります。講師の諸先生は、日頃なかなかお目にかかれない方々でご多忙にもかかわらず、ディスカッションして下さいますので皆様最後までご清聴よろしくお願い申し上げます。

終りに際してこのシンポジウムが有意義でありますことを祈念してご挨拶とさせていただきます。



岐阜県知事
梶原 拓(代読)

本日は2001高山aaca景観シンポジウムへ多数の方々をご参加下さり、有がありがとうございました。知事が抛無い用務のため、私副知事の奥村ですが代ってご挨拶申し上げます。当飛騨生活文化センターは、芦原会長が設計・工事監理され、本年7月にオープンしたものであります。生活文化を基本テーマとして、地場産業の振興、そして飛騨地域の魅力の発信・文化による地域起こしを図る施設として、木をふんだんに使った、非常に温みのある作りとなっております。今日では大人から子供まで「心の健康」が叫ばれております。岐阜県は、県土の約82%が森林に囲まれております。北アルプスを望む自然環境、白川郷に見る歴史的建造群等と歴史的町並みと景観に恵まれており、本日のテーマである「森林文化と景観」に最もふさわしいものと感じております。今後もうるおいと豊さを求めて、健康・文化・教育の場を提供し、やさしく、住み良いまちづくりをめざします。これから行われるパネルディスカッションがパネリストの先生により多くの期待に富んだお話を示唆いただけると存じます。盛会を祈念します。



高山市長
土野 守

第13回2001年高山aaca景観シンポジウムへご出席下さいましてありがとうございます。盛大にこのシンポジウムが、ここ高山の地で開催されましたことに際して心から御礼申し上げますと共に、お祝いとご歓迎申し上げます。ご承知のとおり、この地域は、飛騨420km²にも及ぶ広大な面積の99%が山林を占めている地域でもございます。飛騨の先人は木造文化と共に飛騨の匠に代表されるすばらしい木工の技術をもって木を活用しながら、生活を続けて来た訳であります。木工技術や木造産業が現在も続いているこの地域で本日の「森林文化と景観」のテーマに最もふさわしいと思っています。

どうかこれからのパネルディスカッションで大いに参考になるお話を伺えるものと確信します。森林文化の発展に寄与されるよう祈念しましてお祝と歓迎のことばに代えます。



コーディネーター



内井 昭蔵

建築家、工学博士、滋賀県立大学教授
社団法人日本建築美術工芸協会副会長

岐阜県は日本でも有数な森林県であります。古くは飛騨の工といわれるすぐれた技能者を生み出し、森林が生み出す木の文化の発祥地でありました。日本の文化の基礎をなす木の文化は森林を育てることから木材を産出し、木材加工を加える過程から生まれ、更に木に吹き込まれた新しい生命によって支えられてきました。私達は木造建築の空間やさまざまな木の道具などに囲まれ、独自の生活文化を育ててきたのであります。これらの建築や道具は機能が尽きた時は解体されたり、移築されたりして再利用され最後まで大切に使われてきたのであります。まさに循環型文化が森林文化といってもよいでしょう。

岐阜県では、この度この森林文化を継承し更に育てるための森林文化アカデミーを設立しました。今年の4月に開学され、これからの技能者とその指導者を育てようとしております。このような背景のもとに今回のシンポジウムはわが国の木の文化の中心である高山の地で森林文化と景観というテーマで語り合いたいと考えました。市民の皆様の多様なご意見、御提案を賜われれば幸いと存じます。



佐々木 高明氏

民族学者、国立民族学博物館名誉教授、文学博士、
財アイヌ文化振興・研究推進機構理事長

「環境の分類と認識の文化」

私たちは山を見るとそこには木があると思っているが、世界中ではそういかないところが多い。アフガニスタンの景観に代表するように、山に木がないところが随分広がっている。その点山に木がびっしり生えている日本の国土は、大変恵まれていると言える。私たちが生み出した文化は世界全体を見ても豊かな森林を背景にして生まれてきたんだと、考えている。

“日本文化の原景観”は今から2000年ぐらい前に日本に稲作農耕として大陸から伝わってきて水田稲作農耕として日本全土に広がった。その原景観の構成している、田を林又は田と里と言えるが常にその背後にある山と森との間で交流しながらやってきたわけです。つまり山と森、田と里とが一つに結び合わさりながら日本の原景観をつくってまいりました。柳田先生の「ヤマミヤコウ」にあるように、古くから日本の庶民信仰の中には死んだ人の魂はその林の後ろの方にある里を望む山のいただきに鎮まり里を守ると云う鎮仰他界思想があった。

これは単に日本だけのものでなく、中国の長江、揚子江より南のいわゆる照葉樹林帯にも見られる思想です。そういう山と里、田と里そして山と森とが古い信仰によって結ばれて物を生産しいろいろな活動を生じてきたのです。吉野の谷の人たちは山を、里山、内山、奥山、岳と斜面を垂直的に区分して、上手に利用して生活を営んできました。このように森林文化は基本的に環境との分類と認識が非常に細かく出来上がっている文化だと思える。――(中略) 終りにこの森林文化の持つ素晴らしい内容は日本固有であると共にアジアの照葉樹林帯などと共通するもので、最近では失われかけているがもう一回身につけることによりこの我々の優れた文化の将来を見通せるのではないかと、……と結んだ。



安田 喜憲氏

国際日本文化研究センター教授、環境考古学者

「森を守っているのは少数民族」

森の研究について40冊近い本を書きました、私が森についてなぜ目覚めたかという、学生時代に東北のブナの巨木の林に入ったときです。そこは直径1メートルぐらいのブナ林で早春とあってか、葉っぱが淡い緑なんです。そこに西日本特有の光がキラキラとして実にさわやかでした。僕の中の命というか生命が森の中に入ったときに湧き出てくるような感じで、そのとき初めて「あっ、森が美しい。素晴らしいな」と感じたからです。もう一つ僕が森がすごくすごい。森があるということがすごいと実感したのは、実は就職して外国の調査に行ったときです。僕はもともとは花粉の研究をしております、花粉の化石は土の中に落ちて腐らないのです。湖などボーリングをして土の中に残っている花粉の化石を取り出して顕微鏡で、どんな種類の花粉があるかを見ると、そこはどんな森であったかというのがわかるわけです。

メソポタミアは、レバノンスギでメソポタミア文明を繁栄させ巨大な神殿を作ったわけです。今はレバノン山脈にはほんの少ししか森は残っておりません。これはギリシアにおいても同様でパルティノン神殿があります。このように文明は森によって発展したと云うことが花粉の分析によりやってみました。また他に森を破壊する現況として家畜により森が再生できないのです。ヨーロッパは昔は深い森に覆われていましたが12世紀以降、人間が全部破壊してしまったのです。今ある森は18世紀以降に植林したものです。——(中略) 続いて中国黄土高原地帯の森の問題にふれ雲南省から長江流域～日本に至るカシヤシイの森、照葉樹林の森に共通の文化があり、照葉樹林文化論の提示があり、少ない森を守るトン族、ミヤオ族の生活にふれ、伊勢神宮の夫婦岩を通し同じ世界観を持つ少数民族同様この森を守ることの今況の厳しい問題提起があった。



太田 邦夫氏

ものづくり大学教授、東洋大学名誉教授、木匠塾々長

「ものづくり」というのは田畑を耕す。

「ものづくり」というのは大和言葉で昔からある。国語辞典を引きますと「ものづくり」とは田畑を耕して物売ると書いてある。一方「ものづくり」の方は機械をつくる。そういうイメージが強くなる。田畑を耕す。その田は森に通ずると云うことで、森から物をつくるというのも「ものづくり」の根源である縄文時代からそれをやっていた。農耕以前に建築はあったが「ものづくり」はそのイメージでとらえられている。私は山の生れでもなく都会の者でもなく美濃の太田～松本へ行ったりしたものでちょうど中間的存在で盆地に生きたといえる。そういうところで建築のことをやっていたので循環的に生み出す森と木の文化を大事にしなければいけないと感じ木造のことを始めた。住宅のほとんどは木造とプレハブですがそういう思いで木造建築の世界を調べることになった。これまで日本の木造建築は世界一で日本の大工さんは世界一と思っておりましたが、よそのところにも素晴らしい木造の伝統があった。その幾つかを、この森に対する文化がどういう形で表れるか、それをまちづくり・町並みづくりに出た森の影響について話したい。もう一つはものづくり大学にも関係するが高山の営林署からのお誘いもあって、この夏休みのキャンプに学生を連れ、川上から川下までのすべての文化を包括して勉強することになり、まず森に入り学生と夏を過ごすことになり、木匠塾として学んだ。実に都会の学校でやった学習と全然違い生き生きとした顔で森の中に入って木を切る実習、自分たてものをつくっていく、その姿に強い感動を覚えた。(省略～) 続いて、森に対する文化の違い、民族と伝統、町並み、村並みの景観、特に屋根の造形と材料による変化をスライドによりヨーロッパの各地を紹介があり説明をいただいた。



北川原 温氏

建築家、東京芸術大学助教授

「森林アカデミーをデザインして」

私は長野の山で生れ育ちなので山の生活の大変だという事を実感している。反面、昆虫採集、キノコ狩り、動物との出会い等の楽しさがあった。山にはたくさんの神様がいて、おじちゃん、おばちゃんから聞かれた。実際、山のあちこちにいろいろなやしろ的なものが祭っており、お供えものがあり、山全体が降神の場として非常に大切にされていた。私も特にそういう森の神話に興味があった(父親が文学者折口信夫氏の最後の弟子)。また私は森とは正反対の乾燥地にも興味があって、学生時代にサウジアラビアに行った。アラビア半島を1年半ぐらい日本とアラビアを行ったり来たりして、感じたのは遊牧民の世界で、まったく日本とは180度違う文化に接し一種のカルチャーショックを受けた。いちばん思ったのは私達が一生懸命設計の仕事で模型を作ったり図面を描くのを見て、何でそんな無意味なことをするんだという批判を受けたことだ。彼らの文化には、基本的にはものをつくることに対する価値観を認めないというかそれを作ったり所有してもむなししいというものが根底にあるように感じた。

次にパリに行き現代美術の方に走り、だんだん建築から遠ざかったことになる。きょうは森林文化アカデミーの話をしたい。——(中略)スライドにより説明 森林アカデミーは森林文化、それと森林科学についての実学を学ぶ学校で、建築物も環境そのもの教材となるようにとの要請に基づき設計した。全体・演習林まで入れると約40ヘクタールの広さに5ヘクタールの造形が行われ建設されることになった。敷地には隣接するような形で既存の林業短期大学の施設があり、庭園、テクニカルセンター、情報センター、木工工房等配している。敷地全体がランドスケープデザイン、フォレストウォークの回遊道線になっており、全部間伐材を使用。「非常に繊細と力強い両方が混在し体となって、非常に魅力ある建物となっている。」内井コーディネーターの意見が附された。

高山aaca景観シンポジウムに参加して



aaca会員
日本鋼管継手株式会社・常務取締役営業本部長
ATUMI TATEO
渥美 建雄
大阪府岸和田市田治米町153-1
TEL0724-45-0285

今回の森林文化と景観をテーマとするシンポジウムは、岐阜県高山市の小高い丘の上にオープンしたばかりの飛騨・世界生活文化センターで開催された。雨の中、会場には一般の聴講者に加えて地元の高校生も多数参加し、開会前から強い熱気が感じられた。さすが森や林と密着した生活を送っている土地柄である。aaca会長のいつもながらの力強い開会の言葉に続いて、岐阜県知事のメッセージ、高山市長のご挨拶があり、aacaの活動が開催各地で大いに評価されていることがうかがわれた。

内井昭蔵先生のコーディネートによるこのシンポジウムは建築関係のみならず民族学の佐々木高明先生、環境考古学の安田喜憲先生をお迎えすることにより、森林と人間との関わりを古代から現代にいたる幅広い視点から考え直そうという

ものであった。森林が人類文化の源になっているという話、遺跡から見つかった花粉から当時の人々と森林の関わりを説き明かす話など、日頃の仕事を離れて古代に思いを馳せる楽しみも味わうことができた。また、建築学の太田邦夫先生は地場の建築素材利用による統一感のある景観形成について、建築家の北川原温先生は間伐材利用による自作を例に環境重視の設計思想を熱意を込めて語られた。

パネリストの先生方がこのシンポジウム全体を通じて強調されたのは、地球環境を考えると大量生産大量消費および効率主義の限界が見えて来たこと、したがって原点に立ち戻り森林との共生を重視すべきであり、そうすることにより環境にやさしい循環型の社会を作っていくことができること、それには効率重視から「心」重視の社会への転換が必要、とい

ったことだろうか。実に共感できる話であった。森林資源の豊かなこの飛騨の地が森林文化の象徴としての存在を世界に発信できれば大変意味のあることだろう。もっとも永年鉄鋼の世界にいる私にとっては、アリゾナの砂漠の中の鉄とガラスとコンクリートのタリアッセン、ラスベガスのけばけばしい人工構築物にもそれなりに環境を生かした美しさを感じるのも事実であるが……

質疑応答では会場の若者たちからも多くの質問が寄せられ、これからの社会の形成に一生懸命寄与しようとの若い世代の意思が感じられた。一本の植樹を通して森の復活に取り組む意欲をみせる飛騨の頼もしい若者たちに、茶髪で道端に座っている都会の若者たちの対極を見る気がした。



シンポジウムに参加して



aaca会員
株式会社 成幸・代表取締役
MOROZUMI MITSUO
両角 光雄
中央区銀座3-14-7 鷺尾ビル
TEL03-3542-6711

今回のシンポジウムで、まず心惹かれたのは開催地「飛騨高山」だ。父が歴史好きだったこともあり、私自身も若い頃から日本の風土や伝統には興味があった。そんな私にとって、小京都「飛騨高山」は憧れの街であるとともに、新婚旅行に訪れた思い出の地でもあった。

あの頃は日々の仕事に追われ、新婚旅行も夏休みを利用してのものであったが、実際に訪れてみて、私はすっかりこの街の魅力に取り憑かれてしまった。私の叔母もこの街の魅力に惹かれ、ついには住み着いてしまっている。今回は、その叔母を訪ねる旅でもあった。

開催当日の朝、東京を新幹線を出発し、名古屋で下車。そして、ほやる気持ちを抑えながら「ワイドビューひだ」に乗り込んだ。次第に目の前に広がるアルプスの山並み。幾重にも連なる山々は、紅葉には少し早い、色づきはじめて木々たちが秋の訪れを感じさせる。

高山駅に着くと、会場までタクシーを走らせる。高山陣屋、城山公園、風情のある家々も昔のまま。飛騨の山々に優しく包まれているようだ。そんな風景とは

対照的に、シンポジウムの会場は活気づいていた。450人以上もの出席者、そして数多くの学生たちの姿も見受けられ、岐阜県民の意識の高さに驚いた。

シンポジウムでは、各パネリストが熱心な議論を交わした。世界でも、美しい四季と豊かな水と緑に恵まれた日本。その中でも、特に森林豊かな岐阜県において、「森林文化と景観」というテーマの下で、多くの人々がともに循環型文化について語りあうのは実に有意義なことだ。私自身もパネリストの方々のお話を聞きながら、久し振りにゆっくりと日本や世界の将来について考えることができた。

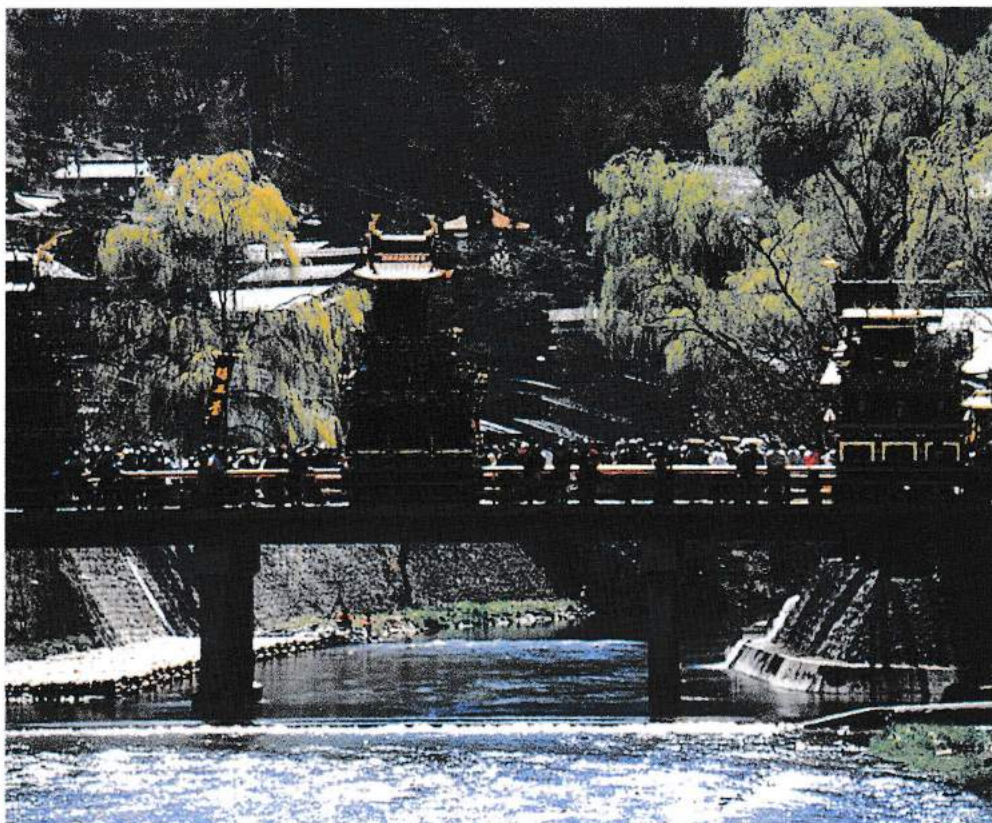
世界には過酷な環境下で生活を強いられている人が、いかに多いことか。私たちは日々の生活の中で、ほとんどそのようなことを考えずに生きている。都会にいたるとなおさらだ。しかし、この私たちの宝物である緑は、私たち自身で必死に守らなければならない。そして、この自然の恵みを受けて造り出されてきた数々の工芸品や建築物たちには、母なる大地に抱かれているような安らぎや温かさがある。この豊かな創造物たちも、ともに

大切に守っていかなくてはならない。

それは、自然豊かな日本に生まれた幸福な人間にとって、決して自分たちの世代だけで終わらせてはいけないという使命なのではないだろうか。今回、初めて出席させていただいたが、忘れかけていた多くの大切なことに気づくことができたシンポジウムだった。このような場に出席させていただいたことを非常に幸せに思う。

その後の懇親会では、(有)アトリエ・ムーブの池上社長をはじめ、多くの方々とお話をさせていただくことができた。印刷業という世界で生きてきた私にとって、建築美術という世界の方々との交流は、実に新鮮で刺激になった。世界は違うが、人々の生活に潤いと心の豊かさを与える仕事をしている同士として、今後も積極的な活動を続けていきたいと思う。

最後に、今回のシンポジウム出席を勧めていただいた伊藤様をはじめ、この開催にご尽力いただいたaacaの皆様へ感謝を申し上げます。





aaca広報委員
(版画・デザイン)
TAKABE TAEKO

高部 多恵子

横浜市青葉区住子田1-6-2
TEL045-901-2009

手造りのおむすびのように

「版画家です」と言うと、返って来る言葉は必ず「彫るのは大変でしょ!」という言葉です。仕方がないと思いつつ、又同じ説明をしなくてははいけないのかと、ちょっぴりがっかりするのですが…。そんな時はいつも「版画には木版だけでなく銅版、リトグラフ・シルクスクリーン他、多種あって彫るのは木版だけなんですよ。銅版は表面にグラウンドと言って黒い液体をぬり、描き、硝酸で腐蝕し、凹状態になった部分にインクをつめ、拭き取り、プレス機で刷り上げます。(その他、版に直接ニードルで描くドライポイントやアクアチント等々ありますが)シルクは描いた作品を写真製版したりカットニングしたりする方法で、リトグラフは亜鉛版(昔は石)に描き、何工程か製版して刷る方法等です。彫るのは木版だ

けなんですよ」と長い説明が必要だからです。もし「私は版画家です」と言う人がいたら「版種は何ですか?」と聞いてあげるとうれしいですね。下絵を描き、製版し、刷るの三工程(自画、自刻、自刷)をこなすのは大変です。刷り師に頼む人もいますが確かにきれいに刷れるのですが、刷り上りが多少ちがったにしても、三工程する事で作家の作品に対する思いや温かみのある心の込もった作品表現が出来るといったこだわりがあるからです。例が適切ではないかも知れませんが、おむすびと同じで、機械や型打して作るのと多少型がちがっていても人の手で心を込めてむすんだものとの味わいのちがいがあはすです。

絵画には、抽象と具象がありますが、「抽象はよくわからない」と言う人がいます。私はそんな時「わかろうとしないで感じて下さい。例えばネクタイを選ぶ

時、柄を見て、この柄はどういう意味なのか、何を表現しようとしているのか?と考える人はいないでしょ!自分の感性に合うから、服に合うからと買うはずです。

ある日スーパーマーケットに行った時、子供がシジミが塩吹きしているのを見て『ママ、シジミがおしっこしているよ!』と言っているのを聞いて、すばらしい感性(イメージ)を持った子供だ!と感動した事があります。抽象画を見る時は、^{イチクスイ}1+1は2と考えず、ある時は3や5になったりする事があっても良いじゃないか!自分が感じたとおりで、いいじゃないか!と考えて下さい。」と話します。

油絵、デザインを過て、大変手間のかかる版画の道を選んでしまいました。これからも一点一点心を込めて、手造りのおむすび(作品)を作りつけて行きたいと考えています。



サンシャイン/97 45×45



遊星たち91-5



日本サッカー協会常務理事
技術委員会委員長
DAINI KUNIYA
大仁 邦彌
渋谷区道玄坂1-10-8
渋谷野村ビル3階
TEL03-3476-2014

「トルシエジャパンと 2002年ワールドカップ」

トルシエが日本に来たのは'98年の9月で、彼が来て日本サッカー協会は色々な面で大きく変わった…と言うか変らざるを得なかった。彼はアフリカに10年サッカーの指導をしていたがその目から見ると彼が今迄やってきたやり方と日本の場合は全然違っていただけである。一方我々の方では、今迄長い間このやり方で来たのだからこれはこれで良いと思っていた。日本代表チームにとってトルシエは初めての外国人監督ではなく、最初はオランダ人のオフトその後ブラジル人ファルカンが監督をやり特に問題はなく、彼等も日本のやり方に異論を挟むことはなかった。ところがトルシエは違っていた。「俺は日本のサッカーを強くする為に来たのに何故それが出来ない」「強くする為には今迄のやり方ではダメだから直ぐ変えろ」と数多くの要求を出して来た。また彼の不満は外に向けてメディアに対しても言ってきた。驚いたのは私でした。'98WCフランス大会が終了後（日本の敗退）岡田監督の辞任に際して新監督を選ばなければならなかった。当時私は、強化委員長として日本代表の監督選定の責任者であったため、私は、以前から「フランスの指導者がいいのではと考えていた。それはこの20~30年でフランスはヨーロッパでは非常に強くなったためです。それは指導者の養生に力を注いだことと、非常に秀ぐれたエース育成システムを構築し、若く、レベルの高い、良い選手をどんどん育てたことにあった。これは日本でも絶対必要なことで早速フランス協会の副会長に紹介願った。4~5人の紹介された指導者の中に、トルシエがいたのです。我々が考えた一番の条件は「世界のトップレベルのサッカーを経験していること」で世界のトップでは何をやらなければいけないかを充分承知していることでした。トルシエは'98フランスWCに南アのチームの監督として出場してこの条件に合致していた。又外国人にとって日本は異文化であり日本の文化を容認出来ることも大事な要件であり幸い彼はアフリカに10年いたので大丈夫と判断した。

契約迄4~5回彼と会ったが非常に真面目で紳士的態度で「日本では是非やりたい」「日本のサッカーを高く評価していてその可能性も認めている」「日本語を直ぐ覚える」と語った「金銭的なことは問題でない」等言われ条件も整って理事会に推薦し、契約は成立し彼は日本に来ました。

トルシエが日本に来て一番最初にぶつかったのは、日本代表とJリーグの日程の問題でした。日本代表チームのメンバーは全員がJリーグのプレーヤーであり（外国でプレーしている以外）Jリーグから借りてくることになる。日本サッカー協会はJリーグの入場料収入の数%が入ることになり協会として大きな財源確保の関係にあり、当然Jリーグのスケジュールを考慮しながら進めなければならぬ立場にあった。ところがトルシエにはそのことが通じなく、「日本代表のスケジュールに合せる」と言うことになった。そのスケジュールとは、日本の大きな課題は国際経験をすることであり、ヨーロッパとは、違い地理的に不利なので毎週実施しているJリーグの試合を月一回、一週間を代表の為に空けて欲しいと言うもので、その間に外国での強い相手との試合をしたいとのことでした。確かに彼の要求は正しいもので、これまではシーズン中3・4・5月でJリーグをやり6・7・8の中断期で1~2ヶ月の日本代表が強化をやり9・10・11月再度Jリーグがやると云うのが基本でしたが彼は1~2月まとめた時間より毎月コンスタントに一週間の時間をもらいたとの意見であった。Jリーグの事情を考えるとなかなかトルシエ監督の通り実施するのが当時は困難な状況が続いたがよく考えるとそれが一番正しいことでもあり徹底した彼の考えが2000年のシーズンからとり入れられ2001年には完全に実施されることになった。このことは日本サッカーにとって大きな改革であり進歩となった。また彼は練習も変えていった。これまでは指導者が練習前にメニューを決めそれに従い時間、内容を完全に消化していくと云う方法がとられていたが彼は全く違って、トルシエ流主義の練習成果で上手くゆけば予定の時間等も突然に変更し必要とあれば全く予定にない

練習を実施する等彼独特の練習となった。香港遠征の時の話したが、あるスタジアムで朝10時から練習することとなった。そこへ日本人学校の生徒等呼んで選手と記念撮影することとなっていた。そのことは当然トルシエも了承していたが選手の顔を見て監督は「少し疲れているようなので午前の練習は中止して午後にする」と言いだした。スタジアムでは既に生徒達が待っているしお母さん達も一緒に来ていた、又、日本代表が海外に行くと言ってよい程10~40人のメディアが待ち構えています。日本人の監督なら恐らくそれ等に合わせるころであるがトルシエは全く平気で中止を貫き常に選手のベスト状態の保持を第一優先とした。但しスタッフは大変でした、生徒等お母さん達そしてメディアへの対応、また練習場の変更と次の確保・ホテルとの食事時間の変更等とギリギリ舞となったが、このことは彼のやり方が正しいと言える。これまでの代表監督は

常に3ヶ月単位でのスケジュールを決めそれを変更なく消化していたが彼の場合必要と思えばそれを要求してくるし、人に迷惑がかかるとか日本の事情、ルールしきたり等とは全く関係なく彼が考える方向で選手育成に望んだのです。また日本代表チームの選手を選ぶにはこれまでは毎試合ごと20人位集めてやるのが通例だったが彼は既に130人~140人位選手を合宿に呼んでいる。このことをとってても彼は可能性のある選手は全て日本代表になれると云う精神で望み、ベテラン・若手・過去の実績等一切関係なく良いプレーと輝きを見せれば選手として選んでもらえる気風となったのです。このことで選手の目の色も変わり、競争も激しくなった。実際、若手でも頑張れば選んでもらえるし、そのことが強化へと繋がった。と思われます。

トルシエ監督の全てに対して全力でぶつかってゆく迫力ある姿は選手にも伝わり、監督は死にもの狂いで俺達を強くし

ていると感じさせ、その情熱に対して、我々も深く感銘いたしました。2002年ワールドカップは組み合わせが決まって本番迄5ヶ月足らずとなりましたが、トルシエが来て日本のサッカーはたしかに強くなったと言えますがそれに加えて代表チームの環境作り、そして日本サッカー協会の地道な努力がようやく成果をあげていることも事実です。



aaca会員募集のお知らせ

豊かな美術的環境の想像を目指す団体です。

建築・美術・工芸等の分野の方々による交流・協力を……。

会員活動

- 都市景観シンポジウム（京都、長野、水戸、静岡で開催）
- 記念講演、シンポジウム
- 交流の集い
- 研修見学会
- aacaトーク 130回を数える講演者を囲んだパーティー形式のトーク。
- 会報の発行 多彩な内容で毎回数多くの参加者を集め、会員相互のコミュニケーションを活発に図っている。

理念

(社)日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな美術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与することを理念としています。

文化活動

- aaca賞
優れた美術的環境づくりを表彰しています。
- ストリートアート・デザインコンテスト 街中の公共空間の環境づくりに貢献する優れたストリートアートデザインを公募、表彰。
- aaca作品写真展
- 各種展覧会（ヨーロッパ町並展等）
- 「都市景観デザインへの提言」建築業界誌に「都市景観デザインへの提言」を連載し、わが国の美術的環境の創造と保存を提案しつづけています。
- 地域サービス活動 文化は地域の気候風土、風俗、習慣、歴史

伝統などに育まれることを理解して、新しい地域文化の形成をめざした地域サービス活動と取り組んでいます。

沿革

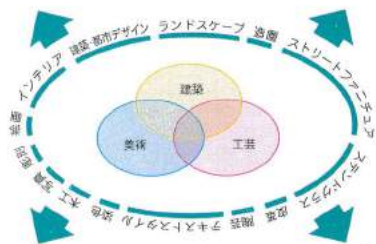
1968年、「新しい建築のなかに美術・工芸・造園などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくり」のために、建築、美術工芸に関する方々相互の交流をめざして、任意団体「建築美術工業協会」を設立。講演会、展覧会、見学会の開催、会報の発行などの活動を続けてきました。1988年4月21日、より幅広い方々との交流を深めると共に、より一層の飛躍をめざして改組、日本建築美術工芸協会を設立しました。そして同年11月28日に文化庁所管の社団法人としての設立許可を得、以来美術的環境の創造を目指し、以前にも増して活発な活動を続けています。

情報・広報活動

国内はもとより、広く海外との交流を図り、建築・美術・工芸などにかかわる情報を収集、分析しています。また、会員である建築家・美術家・工芸家の方々の作品、業績、経歴などをライブラリー化し、一般のみならず幅広く活用していただける体制づくりを整えています。

保存・調査活動

日本の各地には世界に誇るべき豊かな環境があります。しかし、激しい開発の波に洗われ、崩れ去ろうとしています。日本の優れた美術的環境を次代に伝えるために、「文化のための1%システム法」の制定運動をはじめ、さまざまな保存活動を進めています。また、調査面においても同法制定に関しての実態追跡調査、歴史的環境・建造物の保存および再生のための調査研究、パブリックアートに関する研究などを地道ながらも着実に続けています。



協会では会員を募集しております。
お知り合いの方をご推薦ください。
詳細は事務局まで
お問い合わせ03-3457-7998

5ファイブ WORKS 展

aaca会員による5人の異なるアートを、ぜひご覧下さい。

採彫油版革
布・内井 乃生
刻・貴屋武貞男
絵・佐田 興三
画・高部多恵子
工芸・山崎 輝子

日時・4月22日(月)～5月2日(木)
土、日、祭休み(11:00～18:00)
但し、初日13:00～、最終日17:00まで
場所・建築会館1F、玄関ホール
(港区芝5-26-20)
主催・日本建築美術工芸協会(03-3457-7998)

初日17:30より ささやかなオープニングパーティーを開きます。大勢のご参加をお待ちしております。

音声誘導触知盤システム

ユニエコー

ユニバーサル エコー システム

●音声誘導触知盤—触知盤は陶板製—



設置場所:駅前広場・公園・大型施設等

●方位図案内盤—本体はテラコッタ製—



設置場所:市街地の交差点

自動受信システム

IDによる識別システム

スイッチボタンによる音声案内

コンセプト

サイン陶板で高いご評価をいただき、まいりました大塚オーミ陶業が、さらに付加価値を備えた焼き物での点字触知盤を開発いたしました。焼き物を通じて社会に貢献し、人にやさしく、環境にやさしくを企業理念としております弊社にとりましては、「ユニバーサルデザイン」への参画は大きな喜びと感じております。この「ユニエコー」は障害の有無に関係なく、すべての人が安心して簡単に使える音声誘導触知盤タイプの情報伝達システムです。

大型陶板

大塚オーミ陶業

●OTセラミック ●テラコッタ ●美術陶板 ●ユニエコー

問合せ:ユニバーサルデザイン推進室 須貝一好

東京 〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-6 TEL 03(5295)3555 FAX 03(5295)3556

大阪 〒540-0021 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL 06(6943)6695 FAX 06(6943)6487